
任務と日々

今日暇

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

任務と日々

【Nコード】

N6331M

【作者名】

今日暇

【あらすじ】

私立高校に通う高校二年生でありながら、ある軍隊の特務部隊に所属する出雲雨入。

これは、そんな彼の任務と日々を綴った物語。

序章（前書き）

誤字等のミスがございましたらご報告宜しくお願いします。

序章

出雲雨入はある私立高校に通う高校二年生にして、ある軍隊の特務部隊に所属している。

特務、と言ってもその種類は様々だ。要人の護衛から落とし物の捜索まで本当に様々である。

特務部隊とは、そのような特殊な任務を果たすべく集められたエリート部隊である。

そんなエリートの一人である出雲は、登校中にかかってきた上司からの電話に対応している。

「……と言う事があってねー？ 私達の出番らしいよ？」

相変わらず甘ったるい声だ、と出雲は心の中で毒づく。自分より十くらい歳が離れていた筈だ。

「つまり何ですか？ 今度この辺りでコンサートを行う歌手の護衛をしろと？」

うむ、という如何にも威厳あるように言った感じの返事が返ってくる。威厳などかけらもないのだが。

「何で歌手の護衛なんかするんで？」

「なんでもねー？ その歌手の親類がうちの上層部らしくてね？ 敵対組織が人質に取ろうとしてるらしいのね？」

お偉いさんの親類かよー、と出雲が愚痴を漏らす。傷でもつけたら懲罰もんだな、とげんなりしていると、上司が甘ったるい声でこう付け加える。

「そう言えば万が一の為にそちらに増援が向かった筈だよ？ その辺りにいない？」

増援？ と出雲が首を傾げながら周囲を見回す。

すると、ダンボールに入っている少女を見つけた。

「……えーと……あれ？」

「あれ？と言われても私には見えないんだけどね？」

思考が硬直した出雲の問いに、冷静にツツコむ甘ったるい声。

「多分、部隊章を着けている筈だけどね？見えないかな？」

そう言われて良く見てみると、少女の胸の辺りに見慣れた部隊章のようなものが。

「任務の詳細は、その子から聞いてねー？」

じゃねー、と一方的に通話を切られてうなだれている出雲を見て、例の少女が近づいてくる。

出雲が顔を上げると、少女は開口一番こう言った。

「アンタが私のパートナー？随分と冴えない顔をしてるわね、まあ私の奴隷にならピッタリね！」

そう言いながら見せる少女の満面の笑みを見て、出雲は心の中で溜息をつく。

また厄介な事になりそうだ……

序章（後書き）

感想や批評等、お願いします

第一章（前書き）

誤字などのミスがございましたらご報告お願いします

第一章

「さて、まずは自己紹介からかしら」

その声を聞いて、出雲は改めて顔を上げて少女の姿を見る。

年は同じくらいであろうか。動きやすい様に短く切られた艶やかな栗色の髪、端正に整った顔立ち、そこそこ女性らしい体は、特務部隊の制服で隠されている。

「特務少尉の岩代湊よ、

ミナ様とでも呼びなさい」

岩代と名乗る少女は、そう言って威圧的な態度で出雲に手を差し延べる。

「はは……、俺は特務大尉の出雲雨入だ。宜しく、ミナ」

苦笑しながら挨拶をする出雲を見て、ミナがムツとする。

「気に入らないわね……、私より偉いだなんて!」

ドン!とミナが近くの壁を叩く。

「しかも初対面で呼び捨て!? なら、こっちだって呼び捨てでタメ口でやらせて貰うわよ、アマイ!」

「分かった……」

ところで今回の任務の詳細を聞いてないんだが……」

出雲が適当に頷きながら聞いてみると、ミナはどうでもよさ氣に言う。

「それは後で説明するわ。それよりさ、時間、大丈夫?」

言われて、恐る恐る腕時計を確かめる。

8時40分 ホームルームの開始時間8時45分

出雲の全身から冷や汗が出てくる。

「ヤバい遅刻だ!?!」

出雲は慌てて鞆を持って学校へ向かう。

だっせー、というミナの言葉を聞いている暇も無く、出雲は一心不乱に走りつづけた。

私立聖楓学園。出雲が通う中高一貫の学校で、出雲はその高等部の生徒である。この鷹宮市周辺では、一番の学力を誇っており、県内屈指の進学校である。

そこに向かっていた出雲はと言うと、何とかギリギリ間に合い自分の席でグツタリしている。

「どうしたあ？またいつもの『お仕事』って奴か？」

「いつも大変そうだね、一体どんな事をやってるのかな？」

机に俯せになっている出雲に軽い口調で話し掛けてきたのは摂津、如何にも軽そうな雰囲気醸し出している。

心配そうな声色で話し掛けてきたのは上総、顔や体格のせいでいつも女子扱いされている。

「いや……、今回ののはもっと酷いかも」

「「??？」」

出雲の返事に首を傾げる親友二人。

そうこうしている内に、担任の教師が教室に入ってきてホームルームが始まる。

「えー、今日は重大なお知らせがある。このクラスに転校生が来ることになったー」

その言葉を聞いて、ウオオオオオオオ！と教室中が揺れる。

近くの席の摂津が出雲に話し掛けてくる。

「おい転校生だってよ！もしかしたら可愛い子かな!？」

「だとしてもお前には振り向かねーよ」

ガハハハ、と馬鹿のように笑いあう二人を尻目に、担任は話を進めていく。

「じゃあ入ってきてくれー」

「はい」

担任の言葉を受け、扉が少しづつ開いていく。

いやでも美少女だったらいいなー、と思っていた出雲の目に入ってきたのは、

学園の制服を着た、

先程の高飛車な少女だった。

その瞬間、周りの盛り上がり具合に反比例するかのように、出雲の心が冷えていった。

第一章（後書き）

感想など御自由にお書き下さい。
というか書いてください、お願いします

第二章

「転校生の岩代湊です、よろしくお願いします」

礼儀正しくお辞儀をしている姿からは、先程の傲慢な態度をまったく感じさせない。

皆が拍手喝采で迎える中、ただ出雲だけが顔に冷や汗を浮かべている。

（あいつ……、よくまあ、あんな慇懃な挨拶が出来たもんだ……）
などに出雲が思っていると、

「じゃあだなー……、その席に座ってくれー」

と言う担任の声が聞こえた。

ん？と出雲が顔を上げると、出雲の横の空席を指差す担任と、はい、わかりました、と返事をしてこちらに近づいてくるミナの姿が目に入る。

「……、」

呆然としている出雲を尻目に、ミナは空席に座り込む。

そして、出雲の方に笑顔で振り向くと平然とこう言い放った。

「これからよろしくね、出雲くん」

何故か出雲には、それが悪魔の笑みに見えたそうだ。

「ねえねえ！岩代さんって何か趣味とかあるの！？」

「岩代さんって可愛いよね！やっぱナンパとかされんの！？」

時は移って、休み時間。ミナの席には他のクラスから人が来るほどの、黒山の人だかりが出来ており、出雲はいるにいられず廊下に避難していた。

「凄い人気だね、彼女」

苦笑しながら上総が出雲に近づいていく。

「お前は行かないのか？」

「だって女の子に興味ないし、男の子といった方が楽しいし」

「お前……、そんなんだから誤解を生みやすいんだぞ……？」

「？」

首を傾げる上総を見て、がぐったりする出雲。

「そう言えばさ、今度この辺りでＬＩＮがコンサートをするんだよね」

ＬＩＮと言うのは、この鷹宮市出身の女性歌手で、今最も人気の歌姫である。そして、今回の出雲達の護衛対象とは外ならぬＬＩＮの事である。

「そうらしいな、ファンなのか？」 適当に言った出雲の言葉に、上総が照れて言う。

「い、いやあ、それ程じゃないよ？ＣＤ全部持ってた部屋中グッズだらけくらいだよ？」

「ファンと言うかもうオタクじゃねーか」

出雲が呆れながら、上総の頭を軽く叩く。

「もちろんコンサートにも行くよ！」

「だろうな……」

そう他愛ない会話をしていると、授業開始のチャイムが鳴り響く。

「じゃ！今度ＣＤ貸してあげるよ！」

そう言い残して、上総は自分の席に戻っていった。

午前の授業が終わり昼休み、持参した弁当を取り出して食べようとした出雲は、いきなりミナに首根っこを掴まれ連れ去られていった。連れてこられたのは校舎の屋上。いるのは弁当を持って啞然としている出雲と、踏ん反り返っているミナだけである。

「あ、ありのままに起こったを話すぜ！お」「話さなくてよろしい」
出雲の言葉を封じ込めるように、言葉を被せるミナ。

「てか、冗談抜きで何なんだよ一体!？」

「あら、アマイに任務の説明をしようと思ったのだけれども……嫌かしら?」

「是非聞こう」

ミナの問いに即答する出雲。「素直でよろしい!」

と言つてミナは偉そうに胸を張る。

(お前の方が素直というか、単純なんだけどなー)

と出雲が心の中で思っている事には気付かずに、ミナは話を進める。

「今回の私達の護衛対象よ」

そう言つて、ミナは一枚の写真を出雲に手渡す。

「LINだろ、知ってるよ」

「あら、流石のアマイでも知ってるのね」

「勝手に俺を流行遅れにするな、ある程度は把握してるさ」

意外そうに声を上げたミナに、出雲が冷静にツッコむ。

「LINって言つのは芸名ね。本名は能登鈴音、我が軍の参謀総長の親類らしいわね」

「参謀総長ね……、んな会った事も無い、お偉いさんの親類って言われてもなー」

「ま、一つ言える事は傷でもつけたら首が飛ぶことね」

文句を言う出雲に向けて、ミナがニヤニヤ笑っている。

「でも、わざわざ護衛まで付ける程じゃないだろ?」

首を傾げながら問い掛ける出雲に、ミナがレポートの束を差し出す。

「そこにも書いてあるけど、つい先日『暗黒教会』から暗殺予告が来たのよ」

『暗黒教会』

邪神や悪魔等の、俗に言う邪悪な存在を崇拜している集団の事である。

その勢力は強大で、出雲達の軍とも幾度となく争いを起こしている。

だが、何故、所詮一般人でしかない彼等が一つの軍隊と互角に渡り合えるのか。

「『暗黒教会』……、あの『魔術師』達が……」

そう言つて出雲が、苦々しい表情を顔に浮かべる。

そう、彼等は邪悪な存在を信仰する事によつて、『魔術』と呼ばれる現代科学では説明できない力を発揮するのだ。

そして、人々は軽蔑と力への妬みとほんの僅かな羨望を持って、彼等をこう呼ぶ……

『魔術師』、と

幕間 1

(……悪趣味な部屋だ)

あまりこのような事にこだわらない彼女でさえ、そう思わせる部屋だった。

軍の敷地内にある、俗に『参謀機関』と呼ばれているオフィスの一室に、彼女はいる。

この部屋の主のセンスなのか、コンクリート剥き出しの壁に掛け軸が掛かっていたり、畳を敷いている上に高そうな革張りのソファが置いていたり、ともかく目茶苦茶である。

しかし、この部屋の主である、白々しい笑みを顔に浮かべて、勲章が大量についている軍服を着て、ソファに座っている参謀総長は、さして気にもしていないように彼女に話し掛ける。

「最近の調子はどうかね、長門隊長？」

長門隊長、と呼ばれた女性は、対のソファに座り、その長い黒髪を撫で下ろしている。

「調子は良いですけどね？最近『暗黒教会』の動きも活発で大変ですよ？」

その甘ったるい声で言われた話の内容に、参謀総長がわざとらしく顔をしかめる。

「また彼等か……、世界征服が目的だか何だか知らないが、こちらに迷惑をかけないでもらいたいものだ」

「正確には、世界中の人口を生贄にして邪神を降臨させる、とからしいですけどね？」

「どちらにしろ、我等の敵に変わりはないのだ」

はあ、と参謀総長が溜息をつく素振りを見せる。

「まあ？その為に我々、特務部隊がいるんですけどね？」

と長門が言つと、参謀総長が目を光らせて長門を見つめる。

「特務部隊と言えば、私の親類の護衛に当たっている筈だがね……」

失敗すればどうなるか、分かるだろう？」

それに対し、長門は全く動じずに見つめ返す。

「別に要人でもない民間人一人が傷つこうが、そんな重罪にはならないと思いますけどね？」

「彼女は我が軍の広告看板の一つなのだ、傷をつけては問題なのだよ」

二人の間の高そうなテーブルに置かれた高級なカップに口をつけ、参謀総長は話を続ける。

「それに彼女の護衛をしている出雲クン……、だったかな？彼は過去に幾つもの問題を起こしていると言っじゃないか……本当に大丈夫なのか？」

「心配には及びませんよ？」

不安げな参謀総長の言葉に、長門が即答する。

「問題と言っても、全て任務遂行の為に単独行動を行っただけですし能力には問題ありませんよ？」

その言葉を聞いて、思い出したように参謀総長が言う。

「そう言えば……キミ達特務部隊は皆、様々な能力を持っているんだっただな」

特務部隊には、並大抵の人間では所属する事すら不可能と言われている。

状況判断能力や記憶力などの一般的な能力に、武器や軍用車両等の扱いの熟練度といった軍人としての能力が常人より遥かに優れている事。

そして何よりも特徴的なのが、特殊な『能力』の保有者のみが特務部隊に所属されているのだ。

『能力』とは、明らかに常人とは違う特殊な能力の事である。それは様々な場面で活躍しており、特務部隊の尋問は専門の読心能力者が行っていたりする。

「キミ達の力は強大だ……、特に出雲クンはね……」

参謀総長は苦々しそうにしながら、言葉を続ける。

「出雲クンの能力を恐れているのは私だけではない、一部とは言え重役達が彼を恐れている程なのだよ……」

その言葉を受け、しかし長門は動じない。

「でも、何も殺す程では無いと思いますがね？」

そう言つて、長門はスラリとした細い指に挟まれているレポートを差し出す。

「かつて彼を襲つた様々な事故の詳細ですけどね？事故にしては出来過ぎじゃないですかね？」

「私を疑っているのか？私が特務部隊創設の賛同者だったのを忘れたのかね」

そう言われて、長門は黙ってレポートを仕舞う。

「いくら何でも、味方を殺すほど私は馬鹿ではないさ」

そう言つて、参謀総長は葉巻を取り出した。

「さて、彼のお手並みをじっくり拝見してはいかがでしょうか」

第三章

「と言うわけで！早速、行動するわよ！」

夏の短縮授業と言う事でいつもより早く授業が終わり、出雲とミナはまだ明るい空の下、鞆を持って通学路を歩いていた。「行動って……何か当てでもあるのか？」

「当てならあるわよ！」

出雲の問いに、ミナが立ち止まって、防犯カメラから撮ったらしい画質の荒い、一枚の写真を見せる。

「こいつらを見なさい」

ミナが写真に小さく写っている二人組を指差しながら話を続ける。

「諜報部が得た情報によると、そいつらが『暗黒教会』からの刺客らしいわ」

その言葉に、出雲がしげしげと写真の二人組を見る。

一人は、顔が随分と人相が悪く、体格がガッチリとしている大男だ。もう一人は、先程の大男と正反対で顔は柔和そうな顔立ちをしており、体はかなり小柄なように見える。

「てー事は、こいつらは『魔術師』って事が……」

「そうなるわね」

出雲の呟きにミナが同意する。

「とりあえずコンサートまでは、暗殺を行えそうな場所の目星でもつけるわよ！」

「……そういや、コンサートっていつなんだ？」

出雲の問いにミナが呆れたような表情を浮かべる。

「そんな事も把握してないなんて……、馬鹿じゃないの？」

「悪かったな、馬鹿で。で、いつなんだ？」

「今週の日曜よ。県立の自然公園に大掛かりなコンサート会場を造ってるみたいね」

その言葉を聞いて、出雲が考え込む。

「県立自然公園か……、あそこは確か鷹宮山の中腹辺りにあったはずだよ……」

「ええそうね。駅前からバスが出ていて、当日はかなりの混雑が予想されるわね」

ふむ……、と出雲は考え込みながら、偶然通り掛かった近くの公園のベンチに座り込む。

「となると、ビルなんかの遮蔽物は無し。絶好の的だな」

ミナは出雲の話を聞きつつ、出雲の隣に座る。

「一応軍の指示で、コンサート会場を出来るだけ暗殺をしづらい造りにするらしいけど……」

「魔術にそんな小細工が通用するかよ」

ミナの説明を出雲は一蹴する。

「まるで魔術師に会った事があるみたいな言い方ね」

ミナの言葉に思わず少し黙り込む。

「あるさ……、嫌って位にな」

「……、そう」

出雲が発した掠れたような声を聞いて、ミナは深く聞き込まない事にした。

「……さて！そろそろ行くわよ！」

ミナが重い空気を吹き飛ばすように明るく言い放つ。

「行くってどこに？」

「そうねえ……、じゃあまずは自然公園に行くわよ！」

ガシッ、とミナが出雲の手を強引に引つ張りながら歩いていく。

「お、おい！」

慌てて止めようとするがミナの力がかかなり強いらしく、出雲はズルズル引つ張られていった。

「で、ここが自然公園なわけね！」

「今は工事中だけだな」

当然の如く、コンサートの準備中では入れないようだ。

「まあ、三日後だし仕方ないな……」

「何よ歌手の癖して県の所有地を使うなんて！」

「県主催のチャリティーコンサートなんだから仕方ないだろ……」

出雲がぐったりしながら言うが、ミナは納得出来ないみたいに頬を膨らませている。

「いつそ護衛と言って入れないかしら……」

「俺達の存在は極秘なんだとよ。参謀総長サマがそれをお望みだそうだ」

キーツ！とミナが（男から見たら）可愛らしく怒っている。

それを見つつ、出雲は近くの山道へと入っていく。

「とりあえずこの周辺を見ていくぞ」

「あつ待ちなさいよ！」

慌ててミナが出雲についていく。

「確かこの上に見晴らしの良い広い平地があつた筈だ、そこからなら遠距離からの暗殺も……」

「そこを見に行く訳ね」

ああ、と出雲が頷く。

「畏でも仕掛けておけば、連中もあそこを使おうとはしないだろうからな……」

ふうん、とミナが落ちていた木の枝を拾いながら適当に頷く。

「ところで……お前よくそんな格好で山に来れるよな」

？、とミナは首を傾げるが、そう言われても無理はない。

制服が夏用のせいで半袖でスカートに至っては、（制服の作者の趣味なのか）男子生徒が目やり場に困るほどの短さなのだ。黒いニーソックスを着用しているものの、その程度で山の虫の脅威には意味が無いに等しい。

しかしミナは笑顔で鞆から何かを取り出す。

「ふっふー、こんな事もあるつかと！ちゃんと虫よけスプレーを持参しているのだ！」

ババーン！、と市販の虫よけスプレーを出雲に見せつける。

「山を嘗めてるな、こいつ……」

ミナに聞こえないように呟く。

事実、出雲の予測通りでミナは山道を歩いている間、虫刺されに苦しめられる事となった。

「……着いたか」

目の前の広い平地を眺めながら出雲が呟く。

「かゆー……、つて着いた？」

腕を痒そうに触っているミナが遅れて着く。

全く何してるんだ、と出雲が言おうとした、その時だった。

「おやおやあ、まさかこんな所に人が来るなんてねえ」

間延びした声が平地に響き渡る。

「……!?」

二人が慌てて拳銃を向けたその先には、写真に写っていた二人組の姿があった。

「まさかこうも早く見つかるとはな……」

出雲の拳銃を持つ手に力が入る。

ここで何としても抑えつける、何としても……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6331m/>

任務と日々

2010年10月19日08時35分発行